

服をめぐる

衣服の研究現場より

29

2026.08



一人一品

文筆家
村松美賀子

TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI) 広報誌

服をめぐる 29

一人一品

文筆家×KCI

村松美賀子

「ウィーン、パリ、東京紀行

ウィーン工房とマルティース 百年前の女性たち」

p4

KCI Wunderkammer
紙製帽子 p12

地産街道に行く 29

東京都江戸川区 注染 ちゅうせん

p14

今日の補修室 第29回

衣装展示の舞台裏③

p20

学芸員の虫眼鏡
ステッチ p22

お知らせ p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展、「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌『Fashion Talks...』の発行を通じて公開しています。

Website <https://www.kci.or.jp/>

Follow us !!



京都服飾文化研究財団
公式インスタグラム

@thekyotocostumeinstitute



表紙の収蔵品



ストマッカーの着装例
ドレス：1770-1775年頃、
ストマッカー：1760-1770年代

※本ストマッカーは表紙の作品の類似例です。
同一のものではありません。

京都服飾文化研究財団所蔵
成田舞撮影

ストマッカー

18世紀 京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

本品は18世紀の西欧の貴族女性が使用したストマッカー(胸当て)。アイボリーの絹平織の上に散りばめられた繊細な草花模様には、多色の絹糸と金属糸によるコーチング・ステッチやチェーン・ステッチなど様々な刺繍技法が用いられています。中央にはカーネーションとみられる花が表され、その周囲には小さな草花が左右対称に配されています。近世以降、西欧で親しまれたカーネーションは、ミュール(室内履き)などの服飾品にも、モチーフとしてよく見られます。ストマッカーとは、前明きのドレスの胸元に装着する三角形のパーツです。着用時は、その都度ドレスあるいはコルセット(下着)に糸で縫い付けるか、ピンで留める必要がありました。人の視線を集める部分であるため、刺繍、レース、リボンのほか、時には宝石によって装飾されることもありました。

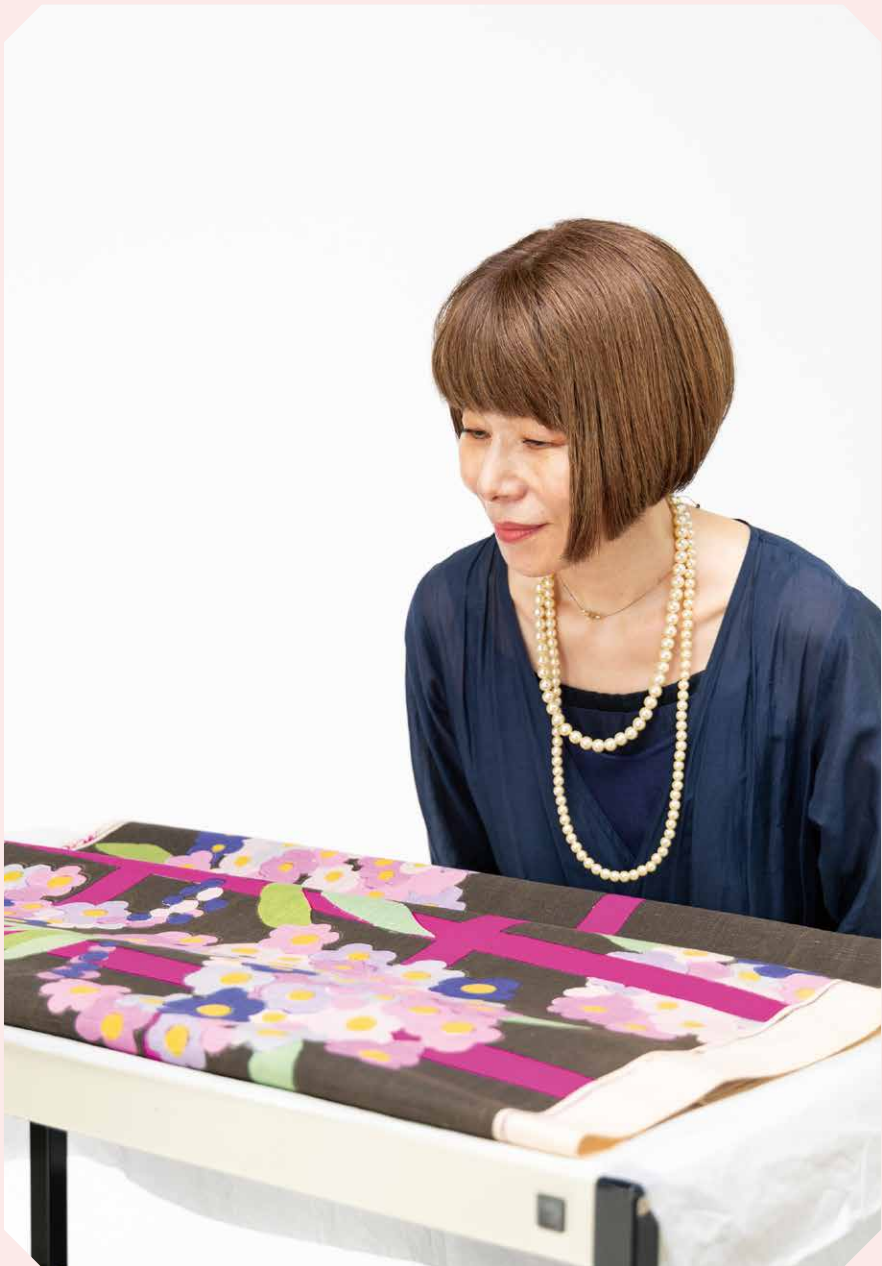
一人一品 文筆家 × KCI 収蔵品

村松 美賀子

Mikako Muramatsu

著名人が各々の目を通して、KCIの収蔵品に迫る「一人一品」。今回のゲストは、文筆家の村松美賀子さんです。村松さんは東京で編集に携わったのち、文筆家として活動をスタート。ロンドン滞在を経て、2000年から京都在住。生活文化をテーマに、さまざまなメディアで執筆や編集を手がけるほか、アトリエ「月ノ座」を主宰し、言葉や本を中心としたワークショップや展示、イベントなども企画・開催しています。著書に『京都でみつける骨董小もの』『京都の市で遊ぶ』、編著に『辻村史朗』『標本の本―京都大学総合博物館の収蔵室から』（共著者：伊藤存）、アートブック『book ladder』、共著書に『住み直す』『京都を包む紙』（共著者：井上由季子）、法然院貫主の言葉をもとに構成・執筆した『ありのまま』などがあります。

現在、村松さんは出版社の青幻舎が運営する「青幻舎note」にて、『村松美賀子「女性と工芸 1900―1945」』を連載されています。その中で、19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパで女性たちがどのようなものづくりをしていたのかをひもといた「ウィーン工房とパリのマルティヌ」を執筆されました。今回、村松さんには、その連載にも登場するマルティヌ工房が手がけ、KCIが所蔵するテキスタイルをご覧いただき、文章をお寄せいただきました。



ウィーン、パリ、東京紀行

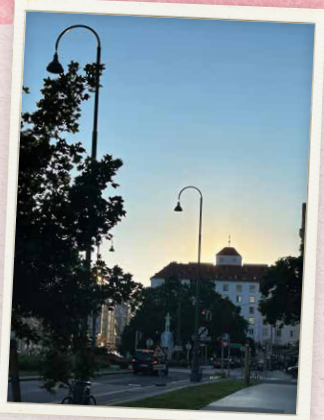
ウィーン工房とマルティナー 百年前の女性たち

村松美賀子

2025年の初夏、ヨーロッパを訪れた。
百年ほど前、モダンなもののづくりにかかわった女性たちを訪ねる旅だった。そのうち、ウィーン工房とパリのマルティナーのことを辿ってみた。そこでは彼女たちが絵を描き、手を動かして暮らしのものを生みだしていた。



p.6-9 写真提供／村松美賀子氏



Wien

2025年6月25日、26日

ウィーン

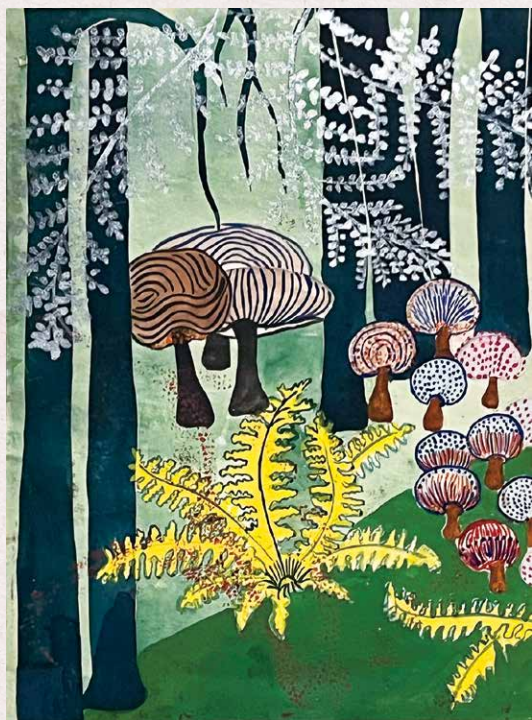
路面電車の窓の外には、白い壁に金色の文字。ところどころ光っている。初めてのウィーンは、白と金の街にみえた。まっすぐ、ウィーン応用美術館(MAK)に向かう。ウィーン工房の常設展示が目当てだったのに、展示室は改装中で観ることができなかった。19世紀半ばの建物は優美だった。天井に描かれた精緻な文様やステンドグラスも、どこかやわらかい。この隣にあった応用美術の学校で、百年ほど前、工房の作家となる女性たちが学んでいた。

翌日は知人の案内で、レオポルド美術館に行った。ここも建物の修復工事で、ウィーン工房の作品を集めたフロアは閉まっていた。

工房の設立者、ヨーゼフ・ホフマンの室内装飾や家具などは観ることができた。建築家のつくった空間は白と淡いグレイのトーンで、一見無地にみえる壁紙も、こまかな黒の模様が入っている。机や椅子は直線的だが、あたたかい。

その後、MAK学芸員のアンネ・カトリン・ロスベルクさんに話を伺った。アンネさんは2021年に『ウィーン工房の女性たち』展を手がけ、知られていなかった女性作家にも光を当てた。宿に戻ってから、展覧会の図録データを開くと、こんな一節をみつけた。「白いスモック姿の若い女性作家たちが芸術家工房の各フロアを蜂のように行き交い、にぎわっていた」。第一次大戦が始まって、男性が少なくなったウィーン工房は、女性を主体とした新しい部門をつくった。誰もが好きなときに来て、好きなものをつくっていいという、信じられないほど自由な場所だった。

翌朝、芸術家工房のあった場所に向かうつもりだったが、あまりの暑さにまいってしまったのか、頭が痛くて身体がだるい。この日も太陽がきらきらしている。路面電車で美術館や博物館の集まる場所まで行ったら、歩いて15分ほどだ。巨大なマリア・テレジアの像を仰ぎみながら、もう一歩も進めなかった。



p.8-9 「ポール・ボワレ、モードは祝祭」展（パリ装飾芸術美術館、2025-26年）の展示より

Paris

2025年6月28日

パリ



パリ装飾芸術美術館で開かれていたポール・ボワレの特別展へ。ボワレが少女たちを集めてつくった「マルティヌ」が観たかった。花や植物などをモチーフにしたものたちは、素朴で愛らしいのに、勢いがある。

なかでも、つよく惹きつけられたのは、少女たちのスケッチだ。そのなかに、きのこの絵があった。巨大なきのこが宙に浮いている。きのこは水玉だったり、波打ったりして、手前には黄緑色の大きなシダがゆらいでいる。木々は黒々と、上のほうには白く透ける枝葉が覆いかぶさる。森のようだが、海のなかのようでもある。しばらく見ていると、きのこよりも、きのこを描いた少女のほうが気になってくる。

ボワレは、装飾美術を訪ねる旅のなかで、ウィーン工房を訪れていた。生活と一体になるそのありように感銘を受け、パリに戻るとすぐにマルティヌを立ち上げた。歴史や技法を教えるのではなく、見たまま、思ったままを自由に描かせる、少女たちの学校。絵にあらわれた「野性」はボワレを虜にした。驚きと好奇心

をもって、目の前にあるものを眺めているような。

きのこの絵の先に、少女たちが絵を描いている写真があった。大きなテーブルを囲み、女の子たちが紙に向かって、ちよっと微笑んでいる。壁にはびっしりと原画が貼りだされ、右手の壁には、脚立にのった子が大きな絵を描いている。白いスモックのような服は、絵の具まみれだ。きのこの絵から想像した夢のアトリエというよりは、かなり生々しい制作の現場にみえた。

きのこの絵を描いた少女は、数年後にはりんごの木を描いていた。見上げた先には鈴なりに実がつき、格子の画面は点と線で埋めつくされ、蔓草も這う。これも彼女の見た景色に違いないが、ずいぶん洗練されて、おさまりがいい。

美術館を出たのは18時過ぎだったが、夏至をすぎたばかりで、まだ真昼のようだ。強い光に照らされて、木々は白く輝き、陰になったところは黒々と茂る。みてきたばかりの色彩を思う。



村松美賀子さんが選んだ收藏品

マルティーン テキスタイル

1925年頃

京都服飾文化研究財団所蔵 来田猛撮影(上)、成田舞撮影(右)

綿と麻の平織の生地に、格子柄とヘゴニアの花のプリント。291.5×82cm。
「マルティーン」は、デザイナー、ポール・ボワレが1911年に訪れたウィーン
工房での知見を活かし、パリに設立したインテリアとテキスタイルのデザイン
の学校。後にショールームへと発展した。このヘゴニアのデザインは1912年
頃からテキスタイルや紙に繰り返し使われ、定番の柄として人気を博した。

Tokyo

2026年1月9日

東京



「アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションを中心に」展
(三菱一号館美術館、2025-26年)の展示より ©KCI



広告「マルティーン」
『牧神パン：パリの高級品年鑑 1928年』より
京都服飾文化研究財団所蔵

ヨーロッパから戻ってきて、東京でも
マルティーンを観る機会があった。
「アール・デコとモード」展の会場で、
黒地にシヨッキンピンクの大柄な格
子からこぼれるように、淡いピンクや
紫の花が咲く。手描きの線の歪みや版
ずれさえも好ましい。こんな壁紙やテ
キスタイルが暮らしにあったら、どん
な夢をみるのだろう。
パリのボワレ展の一角を思い出す。少
女たちが下絵なしに編んだタピスト
リ、咲き誇る大きなアネモネのテキ
スタイルに薔薇の衝立。大胆な色柄
がいくつも重なり合っているのに、不
思議に調和していた。



モダンデザインに向かう大きな流れと
は異なっていた。しかし、展示空間の
中心に置かれた1920年代のドレス
越しにみるそれは、たしかに時代のひ
とつの彩りだったと思えた。



紙製帽子

素材：紙、羽根、絹、麻

原産地：フランス

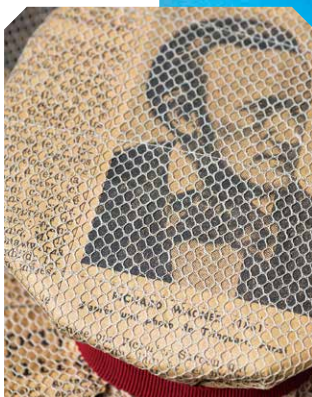
製作年：1940年代前半

京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

フランスで作られた女性用の小ぶりの帽子。前下がりに傾けてかぶる、当時の流行のスタイルだ。赤と黒の羽根飾りが華やかなアクセントになっている。ところが、帽子本体の素材に目を向けてみると、ネットにくるまれているのは何処にでもある新聞紙。なんとも不思議な取り合わせだ。

この帽子を手がけたアルブイ店は、1938年に創業したバリの帽子店。第二次世界大戦の最中、物資不足によって女性たちは簡素な装いを余儀なくされたが、アルブイ店は新聞紙を再利用し、印字や写真をデザインに活かした帽子を制作。女性たちにささやかなおしゃれを提案した。いま見ると、なんてポップなアップサイクルなのだろう！（筒井）

帽子のクラウンのトップに配されているのは、新聞に掲載された作曲家リヒャルト・ワーグナーの写真部分。



珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

——そこはまさに「驚異の部屋」。

KCIの収蔵品にみられる
技法や素材を手がかりに、
専門家へのインタビューや
産地訪問を行います。

東京都江戸川区 注染

ちゅうせん



草花柄の上に蝶がオーバープリントされている涼しげな生地。(成田舞撮影)



KCI収蔵品

タオ・コム・デ・ギャルソン トップ、パンツ

2008年春夏
京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影

多色の草花柄をプリントした白の綿ボイルに、藍で蝶(トップ)と菊(パンツ)をオーバープリント。袖口とウエストに紺の綿平織のリボン飾り。

西洋と日本、重なるイメージ

涼しげで愛らしい一着の服——。ピンタックを寄せV字をつくる衿元は、どこか着物の打ち合わせを思わせる。一方で、ふんわりと膨らむ袖は、十九世紀の西洋のドレスを彷彿とさせる。これは日本のファッション・ブランド、タオ・コム・デ・ギャルソンが二〇〇八年春夏コレクションで発表した作品のひとつだ。この和洋の雰囲気が出合う服のかたちに呼応するように、文様もまた独特の世界観をみせる。薄い生地を重ねて染められているのは、西洋風の草花と、その上に舞う日本の蝶だ。色彩豊かで写実的な草花に対し、藍の濃淡による蝶の表現は抽象度が高い。古典的かつモダンな日本の蝶。その洗練された意匠を手がけたのが、江戸の粋を今に伝える浴衣の老舗、竺仙だ。

江戸時代の新しい浴衣

天保十三年(一八四二年)、江戸随一の繁華街、浅草に一軒の呉服商、のちの竺仙が創業した。初代・仙之助が当初販売していたのは友禅に代表される手描きの着物だった。しかし、客の要望を受け、次第に型紙で染める「小紋」を扱うようになる。このときに得た型染めの知識や職人との絆が、仙之助を新たな道へと向か

わせた。ターゲットにしたのは浴衣だ。当時の浴衣といえど無地や絞りが主流で、着物のような文様はほとんど見られなかった。そうした状況下で、仙之助が手がけた文様豊かな型染めの浴衣は、江戸の粋な文人や役者たちを虜にする。その人気は瞬く間に広がり、竺仙の名は全国へと響き渡っていった。

日本特有の技法「注染」

「この蝶は竺仙で古くから使っている文様で、注染という技法で染めています。この生地を制作する現場に私もいたので懐かしいです。」竺仙で綿布事業を担ってきた對馬貴音さんが当時を振り返る。持ち込まれた草花プリントの綿地は浴衣を染める作業場では生地幅が広すぎ、半分にカットするところから始まったという。注染とは、文様の染めない箇所を糊で防染しながら、生地を屏風たたみに折って重ね上げ、上から染料を注いで染色する日本特有の型染め技法のひとつだ。表裏に同じ文様が表れるため、浴衣をはじめ手ぬぐいの染色にも適し、注染を手掛ける工場は明治以降から全国に急増した。しかし、近年その数を大幅に減らし、現在では全国に十数軒程度しか残っていない。「浴衣の注染は高い技術が必要なので、浴衣を扱える工場はもつと少ないんですよ。作業場でその工程を見

てみましょう。」

江戸川区の染工所へ

東京の荒川と江戸川に挟まれた松島というエリアに、伊勢保染工所は工場を構えている。今は住宅街だが、かつては豊富な用水の恩恵を受け、染色業者が数多く軒を連ねる場所だった。国道を逸れ住宅地に入っていくと、同社のひとときわ高い干し竿の列が目に見え込んできた。訪問時は雨だったが、晴れていれば浴衣の反物がたなびいていたのだろう。同社は大正五年の創業以来、竺仙の浴衣を手がけてきた。今は四代目社長の伊藤匠さんを中心となつて、十八名の職人がそれぞれの持ち場を担当している。伊藤さんによると、注染の工程は大きく分けて五つあるという。「まず、染色前の生地を整える〈干場〉。次に糊を乗せて型付けを行う〈板場〉。そして、染色をする〈紺屋〉。その後、糊と余分な染料を水洗いする〈水元〉を経て最後に〈乾燥〉という流れです。」作業場を見渡すと若い世代の職人の姿もみえる。

注染ならではの技術

「型付けの工程から見てみましょうか。」對馬さんに



生地に防染糊をつける〈板場〉。粘度のある糊を均等にハケでのばすには熟練の技術が要る。

うながされ、〈板場〉に足を踏み入れた。型付けに十一年間携わっているという男性の職人が、幅一メートルほどの型枠を上下させながらリズムよく手を動かしている。「型枠に取り付けた型紙を生地にのせて防染糊をつけ、生地を折り返していきます。折り返すと裏表の関係になるので、型の意匠は鏡映しに対応するよう設計されているんです。」一反にあたる十二メートルほどの生地を防染するには、十二回、型付けする必要



がある。その際、折り返す端が少しでもずれると製品にならないためミリ単位の正確さが求められる。「型染めは本来、生地を固定しておいて、型を動かして作業しますが、様々な型染めのなかで注染だけはその逆で、固定した型に生地を合わせていきます。柔らかく不安定な生地の方を動かすので、相当な熟練の技術が要るんですよ。」對馬さんから話を聞く間も、職人の流れるような動きのなかで糊が付けられ、あつという間に生地が折り重ねられていく。

次に生地は〈紺屋〉へと運ばれ、染色の工程に移る。「配色の指示書の通りに、ぼかし染めをします。」染色担当の職人は、異なる色が入った細長い注ぎ口の「ヤ



染色をする〈紺屋〉。配色の指示書の通りに職人が染料を調合する。

染色が終わると、今度は「水元」で糊と余分な染料を落とす工程だ。十数メートルもの長い水槽には水が流れており、そこでジャバジャバと飛沫をあげながら生地を解していく。次第に薄茶色の糊が落ちると、真っ白な生地に染まった藍と緑の濃淡による紫陽花の文様が現れた。鮮やかにムラなく染まっている。ぼかし具合も美しい。この紫陽花の文様は竺仙の定番で、タオ・コム・デ・ギャルソンの他の作品にも採用され



糊と余分な染料を洗い流す「水元」。
みるみるうちに鮮やかな文様が現れる。



藍と緑の涼しげな紫陽花の文様。文様が途切れなく、ムラなく連続しているのは、各工程で熟練の技があったから。

取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）

株式会社 竺仙
〒103-0024
東京都中央区日本橋小舟町2-3
<http://www.chikusen.co.jp>

有限会社 伊勢保染工所
〒132-0031
東京都江戸川区松島2-19-11

取材文・筒井直子 取材写真・五十棲亘

を形にする職人たち。そのひたむきな手仕事は、時代や地域を越えて今なお、新しい美の世界を鮮やかに彩り続けている。

る。異なる色を同時に吸引することで、美しい多色のぼかし染めが表現できるのだそう。この後、重ねた生地をひっくり返して、その上からもう一度染料を注ぐんです。反対の面と同じ配色になるように。」と對馬さん。「染料を注ぐ場所も量も、ぼかし具合まで両面を合わせなければならぬ、ということですか？」両手の「ヤカン」を巧みに操りながら、職人が「はい、上の面でやったことを下の面でも同じようにやります。まあ、もう長年やっているんで失敗はしないですね。」と涼しげに答えてくれた。



微妙なぼかしを調整しながら、生地の上に染料を注いでいく。

カン」を両手に、染台に置かれた生地の上に染料を注いでいく。そして、すぐさま元のペダルを踏み、染台のコンプレッサーが作動し、下から一気に空気が吸い込まれる。この減圧によって、染料は数十枚もの生地を一瞬で貫通す

←

たのだそう。様式化されながら、瑞々しくもある意匠だ。「この後、脱水機にかけてから、干して乾燥させます。今日は雨なので、屋内に干しますね。」と伊藤さん。二階へあがると、天井近くに太い干し竿が渡されており、その下は一階まで吹き抜けになっている。すると、伊藤さんがスイスイと竿の上にのぼり、竿から竿へと飛び移りながら染めあがったばかりの生地を手早く竿にかけていく。まるで曲芸のように――。



脱水した生地は干し竿に広げてかけ、乾燥させる。この後、厳密な検品を経て反物として出荷される。

←

Today's Tool
バキュームクリーニングに使用するアイテム



Tool-01
ヘッドライト

両手を使う細かな作業時の必需品。



Tool-02
刷毛

ビーズや金具まわりのほこりをやさしく払います。



Tool-03
バキューム

作品表面のほこりを取るメンテナンスの主役。



Tool-04
ハンディライト

光を調整し、作品の状態を細かく確認します。

KCIでは主に作品展示中のメンテナンスや撤収時にバキューム作業を行っています。使用するのは吸引力が強すぎない小型のハンディバキュームで、作品への負担を軽減するため、吸い込み口にはジャージ布を巻いて、あたりをやわらげています。また、衣装にはビーズ刺繍などの繊細な装飾が施されていることも多く、靴や鞆など異なる素材の資料も含まれるため、必要に応じて柔らかな刷毛でほこりを取り除きながら、同時にバキュームで吸引しています。バキューム作業を通じて目指しているのは「汚れを完全に除去すること」ではなく、「作品を傷めることなく、良好な状態で展示と保存を続けること」です。目立たない作業ですが、作品を未来へつなぐための大切なメンテナンスなのです。(油井)

参考文献

石井美恵. 2023.『博物館における染織文化財の保存：文化庁委託事業令和4(2022)年度文化遺産国際協力事業「アルメニア共和国における文化遺産保護のための人材育成拠点交流事業」』。佐賀：佐賀大学芸術地域デザイン学部。
Canadian Conservation Institute. 2010. Mechanical Surface Cleaning of Textiles. CCI Notes 13/16. Ottawa: Canadian Conservation Institute.

TODAY'S RESTORATION ROOM

今日の補修室

第 29 回

衣装展示の舞台裏③

今回はバキューム作業について
ご紹介します。



KCIの衣装展示の舞台裏では、バキュームと呼ばれる表面クリーニングを行っています。これは水や洗剤を使わず、掃除機によって繊維表面に付着したほこりや微細な汚れを取り除く作業で、博物館・美術館では様々な作品に対して、展示準備や展示後のメンテナンスとして広く実施されている方法です。

繊維製品は構造上ほこりをため込みやすく、付着した粒子は見た目を損なうだけでなく、繊維を摩耗させたり劣化を促進したりする要因になるため、定期的な表面清掃が重要とされています。

バキューム作業のようす



展示中も作品のかたちを崩さないよう
慎重かつ入念に行います。



item

ステッチ

製作：マドレーヌ・ヴィオネ店

製作地：フランス

製作年：1924年頃

グリーンの絹クレープ。ボート・ネックライン。
身頃全体に一段9mm幅のピン・タック。

note

静かに落ちる直線的なシルエットに、軽やかな身体感覚が表れるドレス。身頃を覆う細かな波模様に目を寄せると、整然と並ぶ畝に沿って、針を進めた跡が見られます。ミシンの均一な線とは異なり、ステッチにはわずかな不揃いがあります。その針目こそ、波状の畝のひとつひとつが手縫いによって形づけられていることを物語っています。生地を細くつまみ、その折り山を縫い留めたピン・タック。たて糸とよこ糸が織りなす地の目に反しながら、曲線を描くタックを、これほど精緻な等間隔でとり続ける技巧。その一針一針からは、オートクチュールならではの膨大な手仕事がかがえます。

身体に沿う服づくりを得意としたヴィオネは、生地 of 裁ち方やたたみ方、縫い留め方によって、衣服のかたちと装飾を同時に表現しました。腰まで同じリズムで曲線を繰り返す無数のタックは、身体 of ふくらみを受けとめながら、ドレスの表面に繊細な陰影を生み出しています。(五十棲)

▶波状の模様が腰から直線へと移行する、簡潔なシルエット。長方形を基調とした平面的な構成ながら、脇線や袖付けはピン・タックの動きに沿って仕立てられている。

京都服飾文化研究財団所蔵
成田舞撮影

file NO. 07



0 0.5 1 (cm)

肉眼では見えにくい収蔵品の細部に、
学芸員の視点から迫ります。

学芸員の虫眼鏡

KCIギャラリー展示

「ファッションリサーチーズ： 衣服と社会をともに考える、四つのプラクティス」 を開催します。

衣服を研究する態度や行為は、どのような「表現」をうむのでしょうか。編む、書く、縫う、着る、描く、刷る、観察する、撮る。本展では、私たちと衣服との関係を結び直す多様な表現を行う、TALK NONSENSE (小椋真吾+沖裕希)、キム・ソヒ、The Goodwiller (斉藤思帆+岡岡美紗子)、Yutaro Saitoの四組を紹介します。彼らの実践とともに、変化の大きな時代におけるファッションを見つめ直すための、「研究方法」を探ります。ぜひ、お越しください。



TALK NONSENSE《都市を編み直す - Knits & Review》三妻一号館美術館 Espace 1894 | YAU (有楽町アートアーバニズム) まちなか公募2025

会 期 2026年10月5日(月)～12月25日(金)

開催時間 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 土・日・祝日 *ただし11月3日(火・祝)は開館

会 場 KCIギャラリー
京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103 株式会社ワコール京都ビル5階

入 場 料 無料

助成：科学研究費補助金 基盤研究 (C)「芸術実践としてのファッションキュレーションーファッション展実践の検証と応用可能性」
[課題番号：26K03618、研究代表者：五十棲亘]

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第29号

2026年8月31日発行

発行

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)

〒600-8864

京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103

株式会社ワコール京都ビル内

電話：075-321-9221

ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編 集：筒井直子、福岡英城、五十棲亘、木下ミルチ

(京都服飾文化研究財団)

デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子 (Neki inc.)

写 真：成田舞 (Neki inc.)

ご寄附のお願い

KCIでは、活動を支えてくださる皆さまからのご寄附をお願いしております。いただいたご支援は、収蔵品を未来へ受け継ぐための補修・保存をはじめ、資料の収集や調査研究、公開事業に活用させていただきます。KCIの活動にご理解・ご賛同いただけましたら、ご支援いただけますと幸いです。

ご寄附のお申し込みには、所定の申込書をご利用ください。申込書は、KCIホームページの「ご寄附のお願い」からダウンロードいただけます。



▶ 本誌バックナンバーはこちら
<https://www.kci.or.jp/publication/public-relations-magazine/>

KCI ホームページ：
<https://www.kci.or.jp/contribution/> ▶
お問い合わせ：075-321-9221

